

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2005 ～ 2008

課題番号：17720210

研究課題名（和文） 東アジアの鉛釉陶器 考古資料にみる鉛釉陶器生産と唐三彩の影響

研究課題名（英文） Lead-glazed pottery in East Asia- Study influence that three-color ware of the Tang Dynasty gave to Japanese three-color ware production

研究代表者：神野 恵（JINNO MEGUMI）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：60332194

研究成果の概要：

唐代に盛行する多彩鉛釉陶器である唐三彩は、東西アジアに広く伝わり、各地の鉛釉陶器生産に大きな影響を与えた。近年の発掘調査の進展は中国国内での唐三彩の生産、消費、流通の様相を明らかにしつつある。また、日本各地でも唐三彩の出土件数は増加しており、本研究ではそれら資料を収集し、データベース化をすすめることで、奈良時代に盛行する奈良三彩の成立や技術的系譜を考察する基礎データを蓄積することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	900,000	0	900,000
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	180,000	0	180,000
2008 年度	620,000	186,000	806,000
年度			
総計	2,500,000	186,000	2,686,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：鉛釉陶器・唐三彩・奈良三彩

1. 研究開始当初の背景

中国における最近の発掘調査の進展によって、都城、窯跡、墓などから唐三彩の出土

が急増している。唐三彩はこれまで美術品として珍重されることが多く、出土品も主に墓からのものがほとんどであった。そのため、副葬品あるいは明器としての観点からの研

究が中心で、その生産、流通あるいは実用品としての側面については不明な点が多かった。しかし、近年の発掘調査は、窯跡などの生産地や都城などの消費地でのあり方を示すもので、器皿や枕、玩具など実用品としての観点からの研究を可能にしつつある。

いっぽう、我が国においては、飛鳥池遺跡の発見により7世紀代にさかのぼる鉛釉陶器生産の工房が明らかとなった。奈良時代に奈良三彩として盛行する鉛釉陶器の生産が、すでに7世紀に始まっていたことがわかった。しかし、飛鳥池遺跡での鉛釉陶器生産は、朝鮮半島の影響下に始まるが、量産された形跡は認められない。鉛釉陶器の量産は、奈良時代の奈良三彩を待たねばならないが、7世紀代の鉛釉陶器の生産技術が奈良三彩の生産に与えた影響も注目される。

中国、韓国両国との研究交流も活発になり、三国間での検討が可能になった今、我が国における鉛釉陶器生産ないし7～8世紀代の東アジアの鉛釉陶器を考えるうえで重要な位置を占めると考えた。こういった視点から研究を進めるうえで基礎的な資料収集を進めることを本研究の目的にすえた。これにより、これまでの平城宮京の調査で出土した唐三彩や奈良三彩を再整理することで、我が国における鉛釉陶器の生産を再考することができると思えた。

2. 研究の目的

飛鳥池遺跡の調査により、我が国における鉛釉陶器生産は7世紀の緑釉陶器の生産にはじまることが明らかとなった。これらはガラス生産技術や造瓦技術などととも、朝鮮半島からの技術体系の受け入れのなかではじまったと考えられる。日本において鉛釉陶器の生産が本格的になるのは、奈良時代に入ってからのもので、白釉、緑釉を用いた二彩、

白釉、緑釉、褐釉の三彩が盛行する。

この多色釉によって装飾された鉛釉陶器は、唐代に盛行する唐三彩に影響を受けていることは明らかで、奈良市大安寺からは造営に指導的役割を果たした留学僧の道慈が持ち帰ったとみられる200点以上、約40個体分に及ぶ将来品の唐三彩陶枕が出土し、それを模倣したとみられる国産の陶枕も出土した。

日本各地で出土する唐三彩は、陶枕が多いことが以前から指摘されている。これは装飾性に富む器種であることから、デザイン、意匠の導入を目的に将来された可能性もある。とくに大安寺の陶枕には、さまざまなデザイン、意匠が含まれている。このような観点から、道慈が集めた陶枕を再整理することを目的のひとつとした。

奈良時代の鉛釉陶器の工房跡はみつからないが、奈良三彩と唐三彩の産品を、器形、製作技法、意匠などの点から比較することで、奈良三彩の成立を考えることができると思えた。朝鮮半島の影響を受けた黎明期の緑釉陶器生産から、唐三彩の影響を受けた奈良三彩の生産と盛行に至る鉛釉陶器生産の流れを、中国、韓国の鉛釉陶器と比較しながら見直すことで、7、8世紀の東アジアの交流の歴史をよみとくことができると考えた。

3. 研究の方法

中国社会科学院や河南省考古研究所との共同研究を通じ、中国における窯跡（河南省黄冶窯、陝西省黄堡窯）や唐長安城太液池など都城出土の唐三彩資料を観察、実測、写真撮影をおこなった。中国、台湾、日本の博物館に収蔵されている唐三彩資料についても、調書の作成をおこない、データベースを作成した。

奈良市大安寺の陶枕は奈良三彩の生産を目

的に遣唐使によって将来されたと考えられている。これらの生産地を明らかにするとによって、遣唐使が陶枕を入手した経緯がより具体的に把握できると考えた。そのためにも、生産地の資料と比較するための、基礎的なデータ作りが必要であると考え、全点実測をおこなった。

大安寺では唐三彩の陶枕を模して国内で作られたとみられる陶枕も出土している。これらはいずれも厚手で、奈良三彩の胎土、釉調に似る。しかし、平城宮・京より出土する奈良三彩に陶枕はほとんどみられない。奈良三彩の器種構成の成立を考えるうえでも、平城宮・京および寺院から出土した膨大な数の奈良三彩を整理することが必要である。

また、最近の発掘調査で奈良三彩の出土例も急増した。平城宮東院地区および東方官衙地区、奈良市西大寺などから多量の奈良三彩が出土しており、これらについても整理、データベース化をすすめた。これまで出土した奈良三彩の器種構成と整理し、出土場所ごとの器種構成などをみるための基礎データを整備したことで奈良三彩の用途や器種構成の成立などを考える基本的なデータを整備することができた。

4. 研究成果

日本出土の唐三彩資料として、奈良市大安寺より出土した陶枕を中心に再整理を行った。これらは罹災により表面が焼けただけ、文様が不明瞭なものが少なくないが、再整理にあたり、デジタルエックス線透過装置(CR)を用いて観察を試みた結果、文様が浮き上がり、文様構成が明らかになったものがある。これにより、接合関係も明らかとなるもの、他の資料との同范関係が明らかとなるものを発見することができた。また、故宮博物院など博物館の収蔵品と同范の可能性となる

ものや、他に例をみないデザインのものも発見することができた。

大安寺の陶枕には、以下の装飾・紋様に分類できる。

類：押印

(1) 小型花紋・小型の花紋を並べて押印するもの。四周帯をもつものもある。大きさから小(15~16mm)・中(20mm)・大(25~30mm)に細分でき、大型のものには重弁がある。花卉の形状は先端が三裂になるものが多いが、単弁もある。弁数は大安寺のものはいずれも四弁。個人所蔵のものに単弁の八弁花紋がある。

(2) 中央紋 中央に大型の押印を押し、四周帯、左右帯をもつものもある。中央紋の種類から4種に分類できる。

円形唐草紋

宝相華紋

円環紋

鴛鴦紋

類：絞胎

白色の粘土と褐色の粘土を練り込んだ胎土(絞胎)を素地に、透明に近い薄い発色の釉を施すもの。大安寺で出土する絞胎はいずれも全絞胎と呼ばれる、絞胎からなる粘土板を用いるもの。絞胎を薄く切って貼付ける半絞胎(貼付け絞胎)はない。

四弁文の陶枕に関しては、大安寺の陶枕と同范となるものを河南省黄冶窯出土資料のなかに見いだすことはできなかった。同様の文様は、唐長安城醴泉坊唐三彩窯跡など西安近郊からも発見されており、今後は西安出土資料との検討が課題である。

また、奈良三彩についても、とくに平城宮・京・寺院の発掘調査で出土した資料についての整理とデータベース化をすすめた。その結果、これまでの調査で出土した奈良三彩は584点にのぼることが明らかとなった。な

かでも平城宮と寺院からの出土が多い。とくに西大寺食堂院跡の井戸 SE950 から出土した奈良三彩の椀、奈良二彩杯、盤、包含層から出土した奈良二彩鉢、白釉杯は正倉院に残るセットと似ており、寺院が保管する奈良三彩の器種構成を知るうえで重要な資料を得た。また、この井戸と西隆寺の調査で出土した二彩盤の底部片は窯道具の痕跡をもつものを含む。中国では各時代の窯跡の発掘調査から、鉛釉陶器の焼成に用いられた窯道具が明らかとなっており、これら資料は奈良三彩の技術的系譜を考えるうえで重要な資料である。これらの資料は西大寺造営から延暦年間という年代幅が確実な資料としても重要である。

(3)連携研究者

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書](計3件)

神野 恵(共著) 奈良文化財研究所編
2006『黄冶唐三彩窯の考古新発見』奈良文化財研究所史料73冊 p.67,68,73,75,88,90,
96-100,109-111,119-123,138,146,149-151,
154

神野 恵(共著)2007『西大寺食堂院・右京北辺の発掘調査報告』pp.24-33

神野 恵(共著)2007「西大寺食堂院・右京北辺坊の調査—第404・410・415次」『奈良文化財研究所紀要2007』pp.136-137

6. 研究組織

(1)研究代表者

神野 恵 (JINNO MEGUMI)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：60332194

(2)研究分担者